樂訓　中

節序

ロ　9
4119

門口 9
號 4119
巻

昭和41年12月20日
原安三郎氏寄贈

41 9592

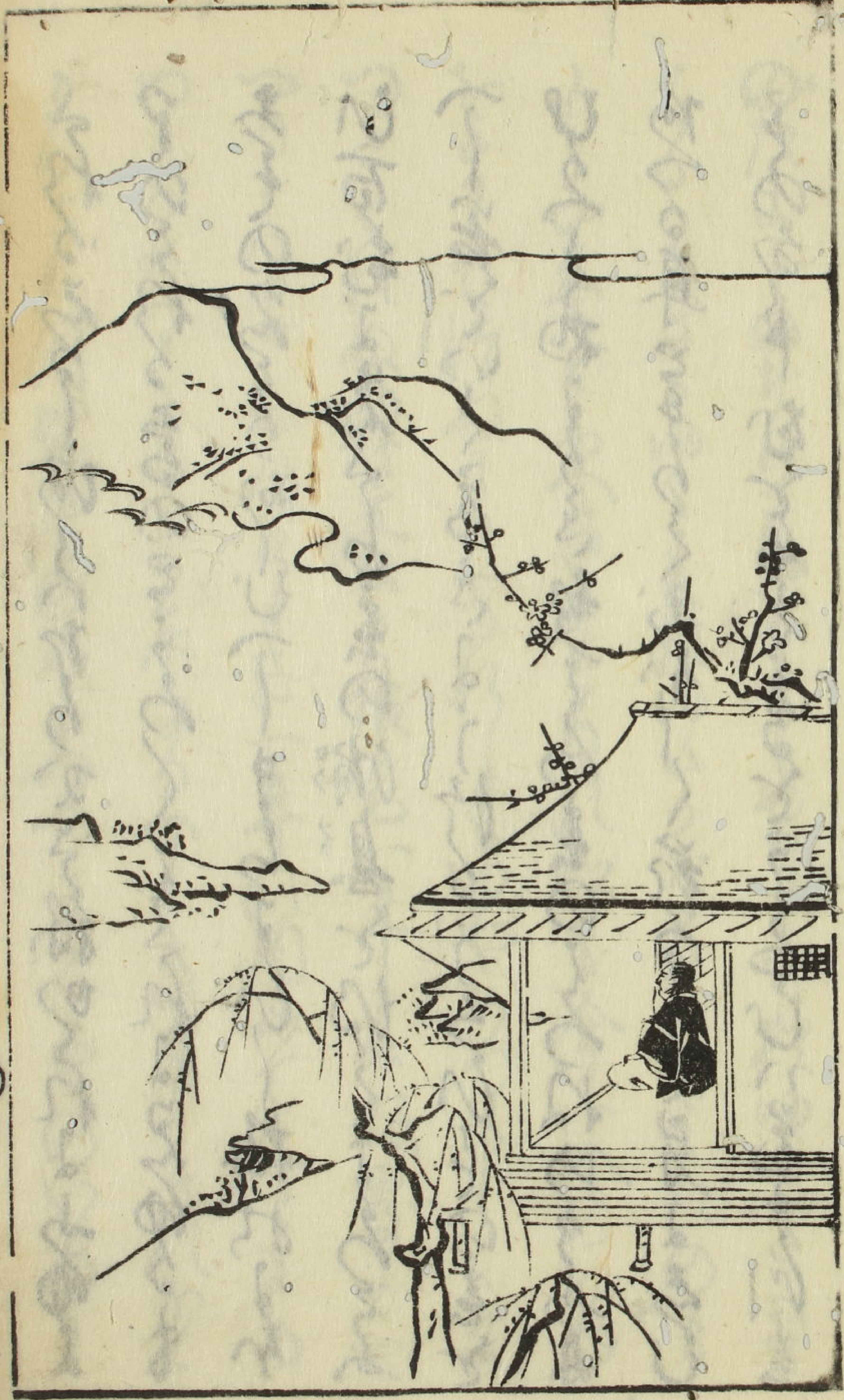
樂訓巻之中

節序

一とせ乃内あめつちのみちは年にめぐり四時あ移たれく萬古より今のかはることやまゝに其うるかすゝさいかより雪の流ゆれるまゝく其きしきありくまあくもり又なきゆくのきしき同くまあとなれ西文造（タイ）きいまゝりたえぬるの見ゆるりえよなりゆく妙（ミヤウ）一とみせるいは日月のめぐりやき風雨のうるおひ雲

雲のきゆる所の雲烟（カスミ）のたなひきたるハ天の文也
地にあつまり形をなせるハ山海れきんたる流れ
河海乃ふかくひろき鳥獣乃鳴き動き草木
生ひしげりまるハ地の文也かくのごとくあめつち
の間にわかれ百物乃あらはるゝ物のさま目の
まへにあらはれて人のたのしむ事とよろこびしめん心
を感せしむる事大なる成るよりこれを成
まん人ハ眼力を以境界とし時を以良辰とし

て其ニ成能る只人の三云れさき万戸侯乃富に
かへんやよく心をとめて玩（モテアソ）ばん人ハ其ニ成
きハまりなかるべし
いでや天地の間にみちたる時れさしきのことハ
まかするきこ成をいそん其ハまれ一歳乃あつるま
ゆうたまの年立かへる弱の室に老ん心はかるに
やふるとしよかりんくのまけし臘月ハあとにさる
て気しき寂も其盛なとしいふべきのとまうく



みえけるにいとおかしきすかたにてましますほとなく父母にむかひ汝はいつかたより来りし家宮のみもとにて名はさらになしとはねはかしこくいとあはれとしめつらかなり時は今は四の始れとそこはかとなくきやうしく引出入ちる風ゆるく咲くる梅のわけをききつくるにかほりこほれうすくたるもひけるさまくに梅をききやかよみてをれそらに立かくれるしてあひまろ菅丞来

これる志るしはかハなりかゝる縁かくれハよかゆよ

まのこれる雲のこゝろくえこれはまんゆるも

ちそのゑこりおもむへしさらまひし梅のれは

ひ百花よ先さら春の消息（セウソク）をゆくよきを

へし翁といふくるきさまうはなるうらひとの春を

むかへく袖のまさき数々の春のこゝろねのゆ身

ほつる耳でまつらく志かしく花なしてあまも志む

ものおもしもとめくあるとうやむハ花すれ春

のたまへのたり花をかしめでて粧ゆくさき

たるまさまさりゆく春れゆくろたるやくそたのも

しき年をふへきをとられ松も今一入のいろ

をましてはねまるんるれしもいやめでたしくな

つさくれぬ韓文公の最花一年春好處（キ）といい

ありしハつの春乃めしき一年れ内みてあくまめ

つゝみすくまでる蔵るるへしきさつてされみて

よろよろ門皆名々の志くろつきさく足ののろう

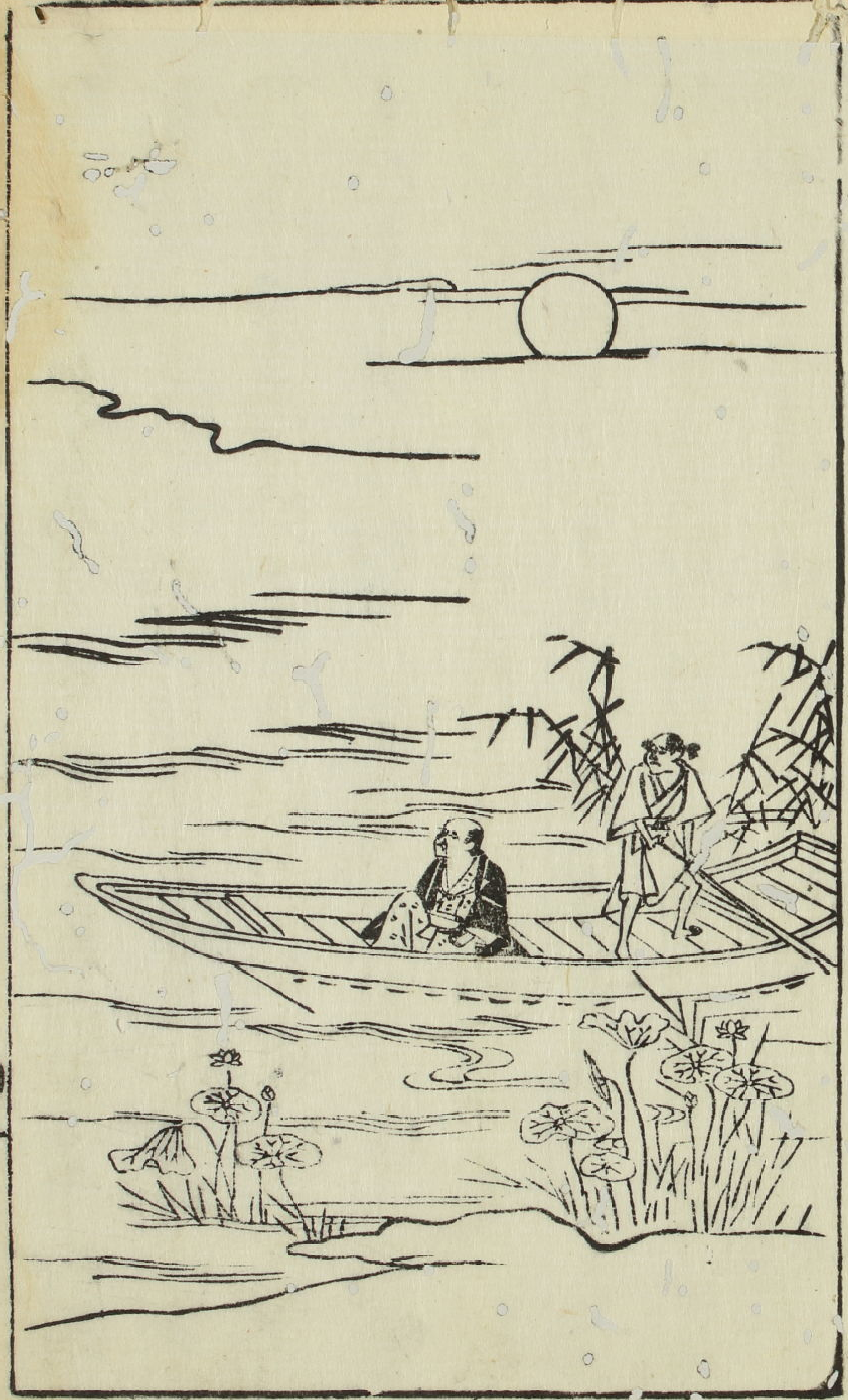
らかに霞しきわたりて四方山もかすミこめてありさ
まよそ心ちこゝよきあけぼののけしきたとふへ
き物なくあはれもふかしいにしへの人春ハ曙(アケボノ)と云
しもむべなるかな日のさしやうのどかに日ハかれ
ならぬ短きの代もなるをかぎりなくやさしく
草木なびく諸艶色を生しむすぼゝれかなる
こやかなる気をひらかれし見すけもやうやくのど
かなりまくゆけ人の心さもなるをしる

いと徒然なきあまりくいそかはしき日なかくして
少年の春の心ちかにゆるぎて海の面日和
よくうらゝ山もうらゝかにかすミわたりたるけし
きいとおもしろし夕ぐれはつく日ハ山の端へ入ぬれと
残れる光猶久しき八日の長きをくらしかねるも
けだし春ハ陽気の時なれるけむやかうへども紙(シ)
鳶(エン)さ云りの花くりるうきいてはき風をかうせ
くもやまくハえるく柳うり雲のよそまくふうのをきく

さかひくをたゝすれと後とハ世ひといひけるこそ
らと何となく見ゆるもあり野まハ又陽炯（イトユウ）と云もの
かけろふとも地より立のほれるをみけるかな
いふ荘周ハこれを野馬と云 老杜か詩に落花遊
絲白日静なりといへるも花をあはしてつねに
ハなちれ花なるを去わきそいにしへつかし又かた絹
の草さるやくもえ出るを見るにつきても春乃
草ハ下よりのかるきらめいて燃いつるし花もやう
くさきはしをそ梅花をそよそろひく後凋
なるハまろ圃なりぬかしめくのむかへる人し桃江
なるハたるひく雲のあかりけのたる色桃と李
白きハ雪か乃雪のあとをみよのこれるかと
見えていとうつくし桜のかたちろひあかるあそ
花よ色ハなちれと人の色とうつして思ひつね
みすかれ花まう日の本かく四附の花乃山桜
さかりみを身一の見えりのされて梅らなりて後ま

ぬはのあした花ハ咲けとされぬされし月あるまゝ
せまくせまく庭らしくきまるの佗くすむも見る程も
なくとくちるハみうらめしうしさハらるまゝく
あるんし山桜花乃さかりを面白けなしとく古
の人のよみきんも後乃おもひ出にせんとや
情ふかし此折から春雨のさびしくあれハ佐らや
との園（ソノ）の桜ハいつよみてんとうしろめたく都
ぞよりにむねよして春のいろをたづさ出せるハ

いとうるはしきなり先なりの春雨らしくふくなれ
を風和かなる日なくてくま西東芳をおしそ山群
も艶（エン）ときそよかゝりあれといつれの春よりか春れなく
らんやかゝるきしきまにふれくハ人の心もうき立
くやよらかハ浅しね春とふねくなくかれ
ありさひ様あれもさてあゆんくしときそ同と
かゝるまゝまし也て慎（ツヽシミ）くもるまゝまれ世の中
れいさくられしき幸ハなるみちなる其一なるへ



まみえの書を読る人ハ無頼（ムライ）少年の閑
と嫌どこそぞろに行ミ来るに似たりと思ふに
ハ芳草雨後に秀く好花風裏に香しき
も此折なり杜か詩に嘗の歌によりて
雨に志けしと云陳希夷（キイ）か睡む情なる一般
の考と論をしり當此附るむのゆゑなくを
まさし其ひとのりくみるもちとに色まされ
る色地そことおるなるに坐し且まおひ二打く

めかつる宋ニ春宵一刻直千金花有清香月ニ
有陰ニ云詩をいひ出さるまた又惜花起早愛
月夜眠遅といへり古人ハかくまて月花をめて
しは今の人乃ふして夜の月と花にはよそしき
てむなしくなれハいとおしむへし又秋の夜のあら風の
うつりかはるをもきゝて寝覚するもあはれなるハ
むしをおしまさるなり此は夕されハおとき山鳥
乃やけぬるも同しころをきこえんものなりされハ春

入焼痕まてなとゝ云又野火焼不尽春風吹復生
をといへるもやけ野の事を詠せしなり古詩ニ
池塘春草生といへりしハ此比乃眼前の景
きを只ありのまゝにいへるなるへしいやしき
まなる此八重山吹の風にひるかへるハ井手
のたまかはも見るに飽してあきへしされハある
れきにたへるあからなり春のむれ松原ある中
に只山茶の〻あをもまつハりさかりなるへしまて

さまへらをおしてうゑさるゝやうくつきつらくは見れ
ども折にふれしのゝめのさうひも夜とまちかね
おりまくてまことハ草木の花咲立枯れくいや
をちよいとまりしくとそくさき清くさ荼毘（トヒ）
まいて人くせの事おくりぬるハあはれおしとせ
見しまれむそいつれとなくひらけ出る文ま
とま月とゝりかれぬるまゝ紀さしかくてもやくら
かぬるハうらめし九千歳まで光ハいとゝかきれと
ほかれとまきらかし風雨もあらけかれハあはれ
事なくまちわくまとさてそしわすへぬまれかなきり
のちよの月の夕くれなさへあらぬ落花寂くたる家
黄昏の間ハまゐの名残いとゞしも羅綺膻（セン）の
まゐまゐ還（ヘタ）一夢といへるもしへるゝかみしまゐとなかう
き世のちるまもまゐるむのきてたまさか花ちんるを
とかつまとちられしよ今より後ハいかゝせんかると
つまよかれくハあくしさう解れく母くるゝくく失ひや

とききし事思ひ出つゝまたぬ老ぬれと今いくとせか
むかしのひゐんと思へし春のとしさハいやまさりね
いとせめて櫻酒餘春とこ出しそてあれ身なとま
すゝめしそへて春のましきいつてその内とこれ
くいときんたんは甚うるはしきなりさ夜云つく
とく人も知らねハかゝるはさちなき詞にハこのかさ
ちしさにかさそういて南風に花ハなとなく
あかりそくひなしき枝とのかさこそ見ぬれ

と花春れ文いそゝよのこりてなりけさくぬる
晴ふりし夜ハ又春よひとり立みくれ夜よさき
かりてかくこゝろよあらふむかしけれハみやひくきよ
けふなるさ夜よ見へて春まてまちれし花思ひよ
もとしまするてちらそし侍る
おしわらもこゝろらぬ春ことそよ老ぬれハしくねよ
きゝゝ夜夜はうしくめはしく今めかしうなる
さとれるはなひ大くこのそれきしききよらよ

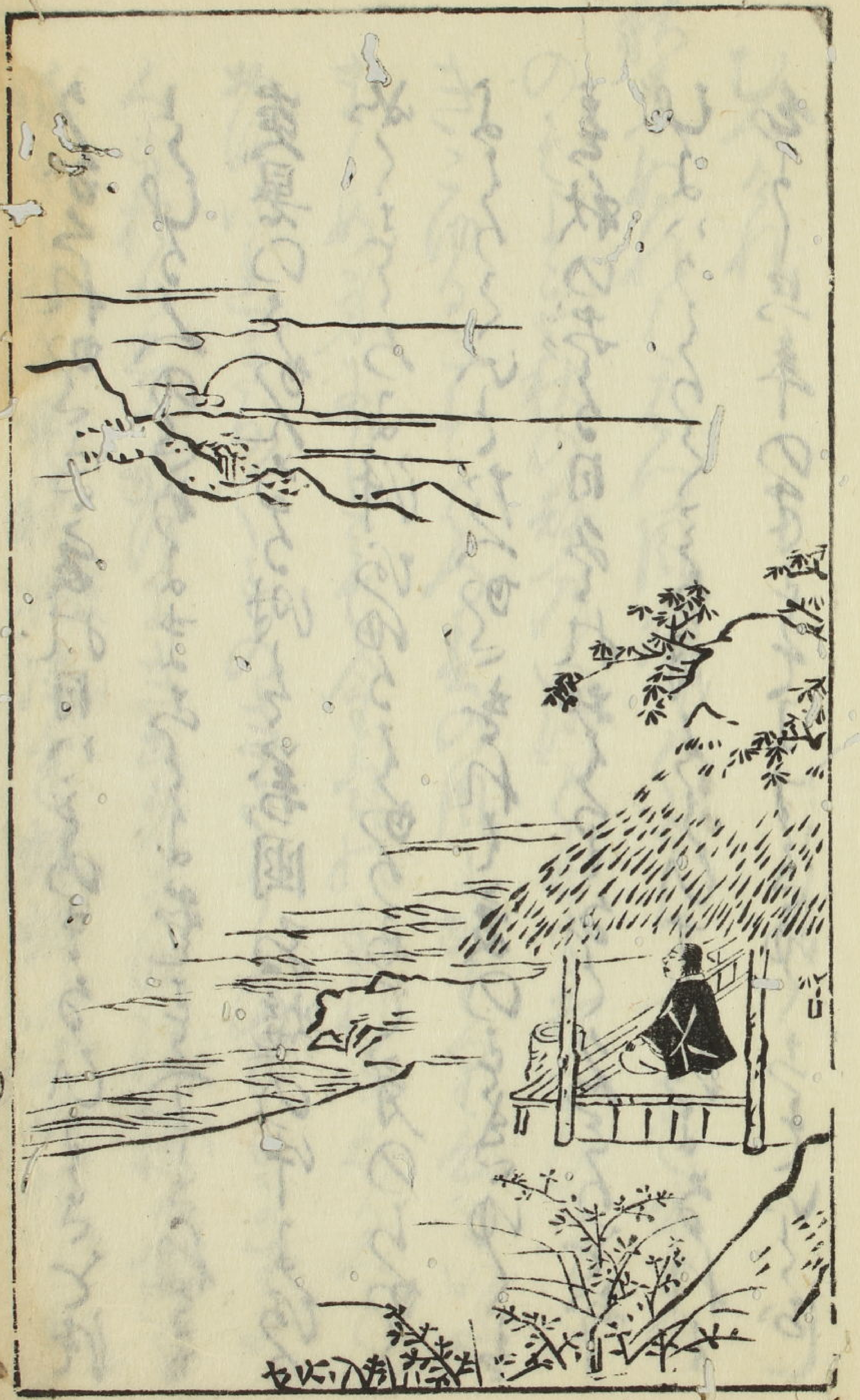
けるに言葉の末と思ふまでやうに拙なくなむ
立かへるまで又世なれたる有さまなるもいとあはれ
かくさし縹渺晝寂をせずれどもつねひしかりし
風流にふける人は繁花をもまさりつゝこれあり
まらぬるかくさしれそろねまろ寄月のくく
鶯の声もきとそてに老いたるにかくれる色艶を
するものらし人は杜鵑の声さく事をなくも
さもしるの日の霞のくは背にこれと何これにて
影みし多くあり我にすむかしそてもこゝろに
すきつれどもさく人ある何かつまてはなれ
次のかぬ所は今一声たよききつまりし又おき
ゆく方の人もまあるんと思へはとききゆくもさう
おうらむ文かくれ卯の花乃かさ根の露にまる
つるもひとらは月の名を都のく葵ともえるに
とゝ二へしかしそ秋月のきしきは淺く和うに
しるとをしてれ夜久しくふつれ飾宮をつき白浪

あるじていふ女物見なれハ出て遊びあそびし物まで
はなざかり園ごとにあそびも風流にてありて在
やよひなれハ日ごとにまうでて見ところ多く夢も
本より皆こゝろの色をあらはして各其趣を
作せるハ詩歌つらね乃めくミをうけしますへい
きる數かきりなきに私なくしていふべきことわり
されハ韓渥が詩に四時最好ハ是三月といへ
るまでことわりされど年たくるかたれバある
さびしきとまじりくつと世乃中いと心よわる也
哥詩に卯月よ至てハみしげれハはやわの李夢
陽が四時の京神友にいたりてハなしといへるも嘆ま
まかなるまでいふべき也又たるかるみ卯月ハかくそ
それやかなれとやそて五月にかりぬまへハあやめそ
られきてきさいのまゐるよしろくさきこれぞ
くはしくさとりくハなるあくおもしろくしく
そぬ時にまくらしかしく花れなやせ見も見へし

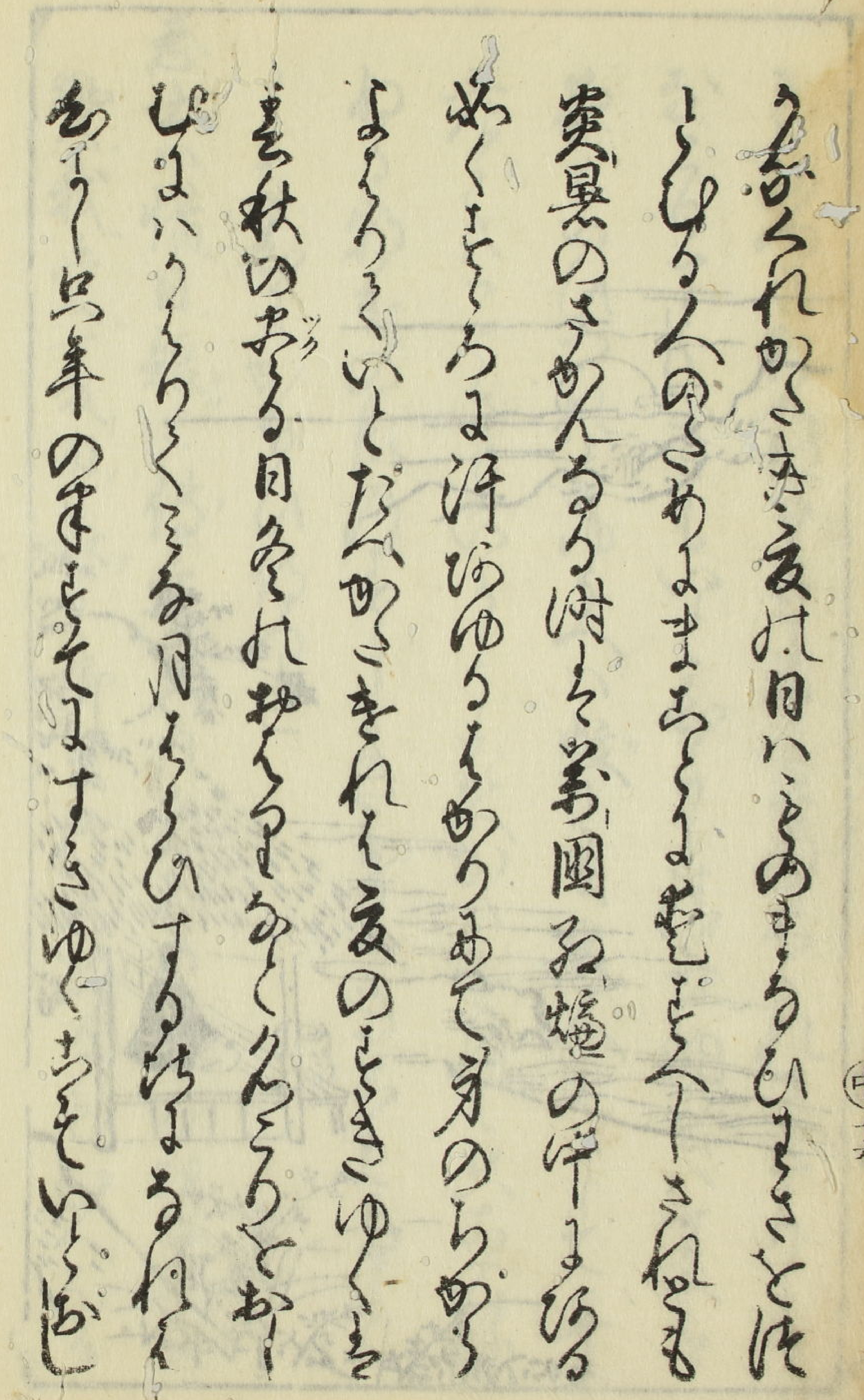
園さらめくふるきひまよ宮とありてつ粧よ存生一
らかく日数をふるもよし
夏のやうくふかくなりぬれハ木々してしなくさる
いなく草をしてさく人さるハなく目をふ小籠と行の
ゆる風のみ見んえさくひすゝしの緑れいろゆる
きな夜まさこそもみもあさくとなるましきれ
秋の花いこゝろくまさくまれたり夜る
山も里もなるさしある草木ニしれ新しへく
萩緑のいろつきれて春よてるなりわなりやち
くさよう人あつめてあつさいし前栽の草木と
も夏をおしくおしく名月稲なとおくまんし下ゆるよ
色よまろれてくおしひしきれるもられしこうんむ
りしお月ゆるむてち花れ明るる夜にてかひっ
せもいとまつり早苗とる田家に面とまら
ゆくいそきりくつききたしいさたちりれ乃わく
つまよろよ蛍れおともせくとそくとえれなく

思ひしられしも久し夜山のあらしさむさこそなる
さりけるたよりなき宿も侍れそゝろにうらめしく雲
のかはにそひゑするをいくまて見んのさそかと
汝をおくれて色を性する鳥の飛かたも白妙の
眼と報（ホウイニ）みしくまたわかとみゆるさへなつかし。
まつ月の影はあかりわたりいよゝ吾の風もさしくる
らそきあらくなるも色うつ池の色にふくる蓮葉（ハチス）
のまことにあはれしてかなしくも夕かせにはらひ

まさるたゝ母もおもしろくれならてこにもの
あはれくらひるひとけるいふせきまくかなし
さらく世にふるうものあはれきゝうしたる浮を
遁（のか）そ在はやとひまくの下風乃あはれかし
きゝは清き泉をむすひ夜をさらすも心さを
身とはいさゝかして光明きさある月と清
き水にやさしく見るハさしかりまり水乃花を
色このきくもいかにしも心ゆくものかなり日あらん



くひつきたへがたきは夕立乃あとくれはとりく
かゝりすゝしきもいとゝ身の清少納言は夏は
夜としるしつれとゆふへは蚊といふ虫ゆへとさして年
老ぬれはてとらしいとうたへかたきは只よの様
ゆる羽おきの風のすゝしききゝしききてきく
して夜はすゝひ待つまし
志士は惜日短に待るいふものは人を皆苦夏
懶人我愛夏日長と柳公権が句をもしんへる



うちくれかたき夜は日ハことのほかなるひまさとは
としよる人のなくさめにまゐらせ候へしされとも
炎暑のさかんなる時より草園名燈の下にゐる
ぬくまとろに汗なかるゝをかりめて身のらから
よそうくいとたへかたきれて夜のときゝゆくに
まゝ秋のあつる（ツク）日冬れおくるまなくなりとおし
ひまハうらくこゝみ月もひするにまゐるれく
ありし此年のくれまてはすゝきゆくをそいとほし

しんくれ

秋来ぬれくもの風涼しくうらゝさそて幾本
のそよき秋の声乃いゝくあも折ひさゝく
きこゆるこそまろ書の風にかゝるまゝこいさ
まつめ身よしこそ今宵れあるゝるうへと
物のゆまとえらくまのさゝそうしのよしみする
くれおりさりかゆよききまうへさ咲流（ケイ）籍（セキ）の懐と
彼さす詩に界秋兆（キサス）二涼気蟋蟀鳴（ク）二床帷一と云

しもはしはの京まで見るも大異なうなく近き
影源をそよきたりぬれどもあかし雁（かり）使の声
つまく旅人のまくらに来れる名残はとゞまるされ
は人の形容ちかくをとゞろく姥もえくしくな
あはれもかなしさ　かくてもまさのつるにはなどと
く万の一時よまきらあよありし面白しむくさの
うき風さそふ下はぎも涙く乃虫の音梢秋
のあはれをもよほしけるあはれ事かぎり
あまく門田の稲葉おとづるゝもひ夕の風れ
あはれくるよくきしきさまくさせおし秋の
色紀くる袖まて袖にせするゆりさ海暮るみる
またくるまくめあり秋乃もるるよありぬれとも
少年とて綺ゐる月あさりきさいは風の光
流れあるかりしひきさ浦のくひきり乃足まし
のあれはよ川乃うるそきし業抱い皆其下（しも）
あなえしまのゆふへ決意よゆくるあそうきさ世の

中ハ面白さもかくれなし過ぬるおりふし年月
をまつて今世ノ四月まて上の空にをくりぬま
ちの猶ますくそれ〳〵欲にくれ名とく朱
にまじめ目と悦しむる事さかるはかにとをしあ
とまして三秋のなるおくりいそしきえと年
てこれ名よまるせくなる事まてこるよさ安い
然ハさ浮世たらねしてそ天か下の君ハ八さとゝ
とあくしめて天性ハ落葉まて少しなく

みの内なれとい中きよる堂中まく、ひのまんさそ
ちよ只ひとつかつれる月と都のうちもれとてお
よいまゝよ河ってさうんかもいとかしてく多母
河まりくゆらしき舞おもの中よるとれい中きき
ちまるさそも向くてる世るいとかくさうし年をあ
月とむとくとわくまそえるハまて只思ひくお
ほきこ浮世念のさ立下わて衆の月なれハ回
るハ名志れん人とたまつらんてそおのなれと内

こゝろなき人もあはれなれバ西行もひとへに月ハ
見る人からなりけるとしよめるもしるらんさてこの人
も秋月ハ隠士と見る人からなれどもいふなる李白も今
人ハ古時の月と見えしといへましかし世くみ
人のうつり變れども此月かはれで古人のながめしを
ながむるも昔見えこしのけし古今の人乃
世ゝさりゆくハ流水の行てかへらざるがごとし只月
のみのこりいかし人今かはり事なきこそあはれなれ

すゝきたつところへされ月乃梧桐の上みに
そよ風の楊柳乃をもてまるハ色を添ひ思ひを
もよほして忍もいはぬ枝ををりて也何はゞも
ま思ひ出昔をしのぶ世なれどそれさへ秋の月を
見たらん後乃世の光までも思ひやられ侍る
秋もすぎゆけハ昔をこふよそに鴈がねの
涙かゝりてなきさるるも涼しかりしもいはまし
とおそいはれど秋まさる花昔がなかめるさかさ

歌人にたてる詠まれ久もあらぬいたゝしき梢く
華しくよりしき露をきちゝまうく見ゆれ
そ秋の野いとましめほりし秋のむし乃なくさゝ
たへてちりかくるをは春の花乃こゝろほとゝもな
くこゝろやちりぬるにまされつとはなそもの
いとけやけさハ春ハ梅櫻桃李海棠なとも
艶多きハ陽気はさんそくよのおれる花や
秋ハいろくさわもすゝし尾花も萩もなてしこ

其はなさうか卅七種のかそへらうつゝんなり
かくくさゝのむ種も多かり秋ハまつ張年上へ
くられる花あるをすゝやなてしこ春ハ只ひろの盛なの
見ゆれと夜よりさゝそめく秋のいろとなくそせ
なかかくのやまくのいろく乃むそさくめり尤月見へ
ちハ秋のむしもすゝきまゝらまきてさあり
よ萬八百ある花くまてゝ百晩言とさむら宿
れわさりく見えかれいろくとありけりあるくのむ

よはくとおしみまるのゝあにハいつかくらまかひと
かにてをもすくれくおもやうおはく此付りも
名くゞもうけくにくれひハさきまよ秋のまよひ
とりさかりかれくおりよなひくいとめくくし元
稹か菊を詠して不是花中偏愛菊此花開
盡更無花といへりしハ菊をめてし心なるへし
此花ハ萬葉集まのうたに古今集よハ御しそれと
ならの帝の時よゝくまゝこめかうしよりわきまへてさ

ありし事今さら古を思ひ出しなも称おくなれハ
らかしもろこし屈子か離騒に梅とつらねられし數寄
をみし老杜か海棠を詠せさりしハ祖母か名なれ
はゝかりてなし菊ハ取わきて世ゝにもてはやされたる花
れんハ出やかれとこの花人もとなし牡丹ハ富貴
なるものなれハ遊俗乃もてはやしける事にや
欧陽子か人のこゝろを甚このむにまかせてハ志るへし
といへるけにさることそかし

凡つよ世乃円梅のさかりをかしよりも萬よう江のまそ
いろいろのむめ乃さかりよ匂ひきそひてあはれにみえし
やうをしれは心ありくの事も亦思ひ出すへきか
なりし

秋ハ陰気きはまれるにしめあはれハそこしきいたりすさ
まじくてらく天かくうかして月日の光ゆかしけく
よのにほひりえなるよ花くさして ひろく風いてくる
まてしくらき甚くしき人の心よしるそ感すへし

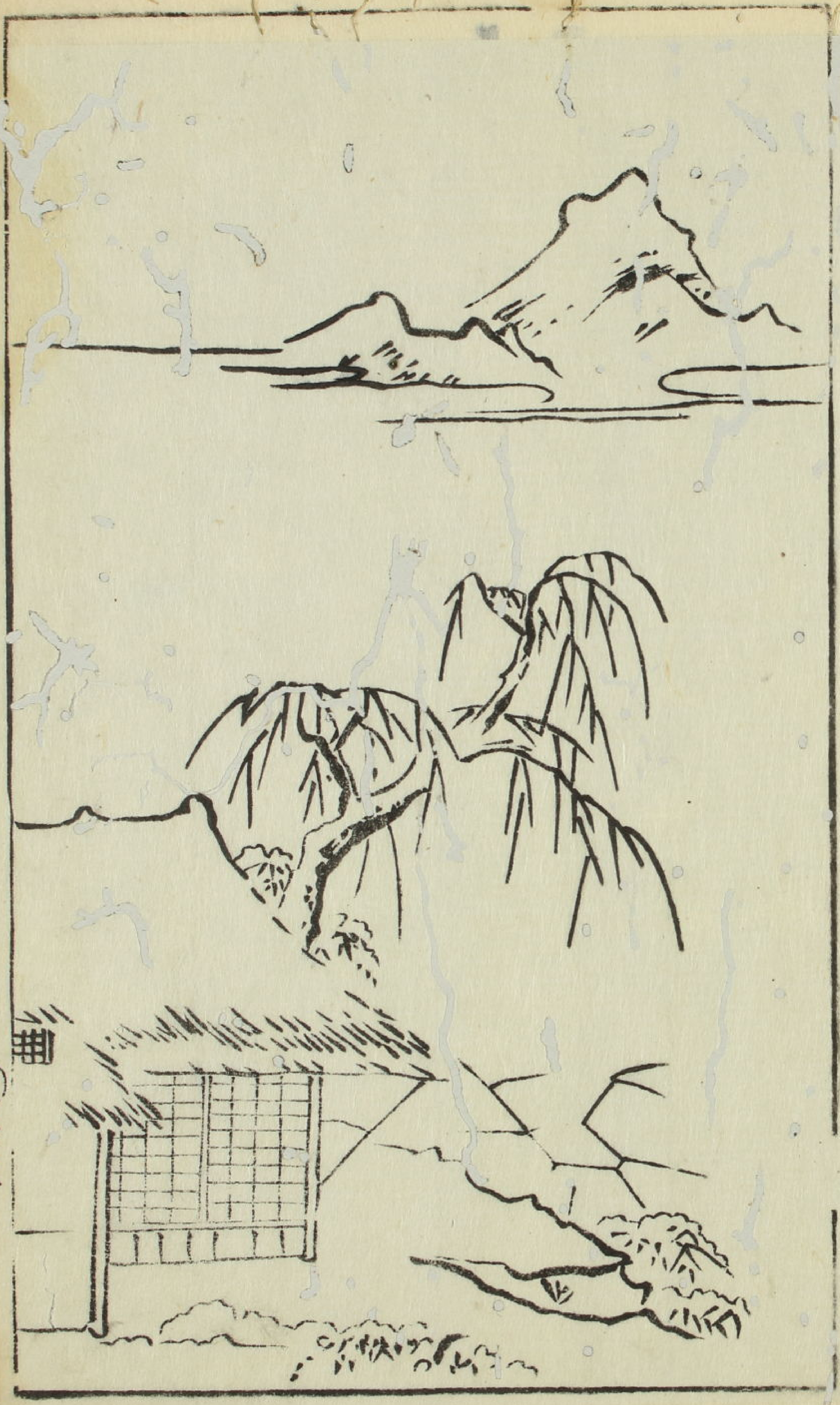
むかしの事なりし春ハ只花のひらくをよろこふなり
物のあはれハ秋そまされるとよみしも尤よし
ふかひてハあくまてよろこそ覚ゆかれ
陰眉云う世の人ハ皆秋の月をめてゝ秋の月ハ妙なる
ると云ふといふハ其事世の人も心つきなかり
しるまいりよきものの同しく絶る事をゆるさき
ゐもやうきを覚ゆめる心をはけしく秋の月乃光
草木こよかゝやきいさきよくかゝる事をしるへし

ひんかしなるをもつて其きさしをきはやかしなり
こゝは夕陽の西にかたふきてさしいりて海にうつる
まんとくするころそ世にみさへひとしく冬をもいそぬ
ゐるか発したる道同しく月は、掛ほそくにて川なけ
なしへさる見給れは第一花にとられるはむへなる
哉かな

秋は夕くれのをしきこそたくひもなくみえゝ
はなさかれまろゝに立のあるさまをかけし風のおと

むかしの孫いつれともなく人の名にきこえて表にかき
さりあるされはつし秋は夕へとされたるはきさる人ゝや
夜もきれは暁の名人と称るゆしやさとく孫さ
めかしたりてとさし老の孫なりはたやくさめて
老に夜とのことせいの孫これねまくらに懐古の
色わかれにましてきうかたゆくさと思の筆あまた
ひつけける老くはつ孫に青ののかすのこそ書の
よしき

よろこひ此人ハつよせの様ちられまとめてかくすま
ものまこと愛せし詞多しまろくなの人ハ青より
赤よろ紙をめける時ハとひとめく人まの図
此人ハつこ色も無月はしせり妻秋のことハ
早陰陽ふくなれと其名きれいつまとゆるく
猶くめくさけまハ此あらそひハいつとき歴暦
とひふともまろらめさうるゝしいそんや人の気同
しめくさる事其面（ツヽミテ）れぬくおれくも其身志ゆう



いねとよろしく長夜のたよりまさりあるあへ
しまん霊れハ世よつけほくらいるまゆかんい
川まとさまされりしきうめかくしむかしのち
れるもいつまでまつりておしへかくし
長月は末になりぬれば秋のむしもおとろへ虫の
音もたえさかれくもらしやしくいろつきぬま
ハ秋のくれ物思ひも赤ふうし枝ハ只なふそ
つきそくなるも名残いとをしかるべし　去

れはくるまくふれて草も木もやうくかれなそ
爰ゆ末のさしきさまて思ひやられくさびし
冬も来ぬれはきさよりなるこゝろつく火のりを寄
くまくるあられかくし霜を置しおとさかくしかと
ちりろて木のめこゝろを思浅茅か原も冬のまゝ
れなきさそふかれもかくするも枯すまとなる
まの絵はれの神無月の時雨すさそて日なくての
かれいかにし長河の名残をとし十月を小春と

とゝつされと一の日二の月中ぞおもかさなれハ風
まいかなるをきく木の葉ちりくるもはかなき
見え給へる松も常よりさひしき夏秋の色ん
なるをききよろしかりける後のさ夜詣附
まいてうくはさぬまゝハ出るのかなもかいわか
みそろみと月かくろかれぬるひとつ雪いさう
ちかくいつゝしうつりぬる暁ハ山ま里しのも
すゝ浮世界となりく世のうつりきしきよか

不給はさまかりそこよりせし備わかれたる世よ
をひむさけるかかりしあそこうかれ蕨のよまる
羽よ雪れひろわしひろこえあそ見える人なく
ひとり身よ老そてはなれもちりきれてうなく
後まそ友まろてかりところくまこえ給へる
そぶれ雪もいとさめしかる附するまさなく
兄雅ろうてへていくきさ居る人いいとまひしけ
よまのまゝうてまきかかへ文とまゝきさひろる

とかくさと渡る人ハたのしミふかくそこなふへき
丸乃事年よりさえて早くもろくなしまうき
附つゝかなく文ともよくかゝりける附もまかり
かゝるまし
冬乃まつりさゝめきもいろめれハおとし九月乃夜語か
よくたくあまくのびくかゝるてさかりの茎
丸とかりまそそまちかしくしの打ちるハいくしくしくへ
くさきひのうさかるハうれハしられとなつかし

きしとむかふるハめつらかせもよろこふべし此と
ろハ世の中乃人何られていそかしくせきあへぬ
我ほくのくきりくもしてまとふとひよりきたる事
まとへる人ハたのしみて世ハいそかき道の事
地してるとあれハほとをかりみてせわしなからう
おもし天下先の事ハ月日もいとさやさく何事
とも心させ一とせるる代かくへそふるもうらめし
それらく人の世をあるかふかく深も変かきる事か

るべし一とせ乃内にさま〴〵になぐさむる人
はまたたのしかるとや春秋のくれ行さまにも名
ごりおしく思ふべし一年のかぎりの名残日
の夕暮にはぬるとやかなしきの人は古歌を
いひくこよひはよしとかしこい孫すゞりや思ふ
あさきとかゝり新しきをむかふるこゝろ也
おくりむかへに涼さそへまひよろこひ上下る
らと九回の河乃おしてはしる折ゝは涼さそ

感じておこる人ハ情ありて詩人ハ花によろこび悲しみ
遷客ハ花によりて愁しむ京客ハ月に花と共
見る人かなしみかなにもことゝても歓びのかなるべし
一とせの内とさだめてくれゆくにも春ハ陽気をしめくの春
つまる萬物生れそふれくるしきのところみ人の心まう
らゝかにしてみさりし夏ハ陽気さかんにより
宇内にあふれてこゝろ一天地まりしたりく萬物未
けく萬物おちて秋ハ陽気をしめくくちて陰気

のなり萬物おさまりてきびしきいさゝかよく人の
心にあらで藏する事ふかし春に對してゐる
からおもてしるれども冬ハ陽氣おとろへくらく
陰氣まさりてはなはだしく萬物かくれ夏に對して又
うしとらにてをはれりおして一年のめぐりて冬し
いたりて三統まし それこゝらふきなりく品物
かくまこれわれ春生し夏長し秋をさむる事よく
なる志まさりたてく月日ハたはくうつりひゆき

と須のうるはしき氣象も見えて此四時乃閑あく
なきと事なくていてはしたる時そさみゆゑと
春夏秋乃うるはしきながきいとをるさま
さく此時よいたりてまりてよせ乃よろなる功を造
ときりくそことくのえ氣まとふくたくさへかく
てあらはるる春の如くなりおほくうくとふて万物ハ
此時よ子うんたるされど冬は陰の一かさよと
ちかられくなきと事なきハてよせの功成事

遊くおくりておもたるのこゝろにみくるとし九歳生
のあらそひとふくミたんぬれハたしかめつらかなりといふも
人の袂ふく秘ハりすまへつまれるにハ〇まに乃
いたつらをやをとめ物をもつこれをおもてるおもさの〇ち
かくのむかしおもハりけし袂よくい〇されハ今日のいか
くらりをせせとめあてゝ明日のそくてらきもかくあらさ
とことし名をまあるらくゝ人ハ亦大の時にまつてひ
てあつよ精神をせてつゝへし

それつらつら世の代月日のめくり四時乃移りかハれ百物
のかハる花ハいく年ゝにあらたなりしハ古より来
乃世もまたかハらさる事なるの謂ハらてたう
こゝろふへしさるゆへにこれを盛とする人ハ甚未
かならすしもよく此理をしれらん人ハ是即道
をしれる人なるへし
時されハ間なくてゆるやかに立しもなきれと日数
のさかりゆけハてらせれるまことハあるとしるし人の一生

とかくも亦心やすくくらさるれハ老死にいたる
喜しきをかうと況人乃いのちハいくらくなやうく
すしくあした夕をまつほと少壮といへと老たり
ちえうら人多きれハ形なし久しからさるうき
世るはのうつりゆく事早きれハあまつ附日
とひおしくるてと人かゝれ

樂訓巻之中終